

優秀賞

# 『いっぽんの鉛筆のむこうに』を読んで

茨城県 日立市立豊浦小学校四年 小林 凜太郎

ぼくは、小学生になってから、小さくなった鉛筆をカンの中に集めています。なにげなく使っていた鉛筆が、どの様に出来ているのかを知りたくて、『いっぽんの鉛筆のむこうに』を読みました。

いっぽんの鉛筆を作るには、どの様な材料が必要でどうやって作るのだろうか。鉛筆ができあがるまでには、たくさんの人と物が関係している。木を切る人、その生活、木を運ぶ人、その人の家族、木を加工する人、その家族や生活があるのだと知りました。スリランカ、ボドラ鉱山。ポディマハッタヤさんが、地下三百メートルのむし暑い場所で鉛筆のシンの材料の黒鉛をくだいてとっている。その黒鉛のかたまりをトロッコとエレベーターで地上へはこぶ。それを小さくわり、よりわけるのは、女の人やお年よりの仕事だそうです。

次に、アメリカ合衆国シエラ・ネバタ山中で、イ

ンセンス・シダー（ヒノキの一種）を切りたおし、かわをむきせい材され、一年間かわかした後で、長さ百八十五ミリの「スラット」とよばれる板に加工されます。これが鉛筆のシンのまわりに使われる木です。このスラットは、メキシコのコンテナ船でアメリカ西海岸と日本の間を十二日間かけて運ばれます。日本では、山形県の川西にある、三菱鉛筆山形工場に運ばれ、この工場で鉛筆は作られます。スラットにシンのはいるミゾをつけ、焼き上がり、あぶらをぬれたシンをいれ、もう一枚のスラットをかさねてはりあわせ、一本ずつにきりはなし、目止め、下ぬり、中ぬり、仕上げぬりと、何度もとそうされ、はこにつめられ、ぼく達の住む町まで届けられます。

鉛筆が出来るまでの仕事で、ぼくが一番すごくおどろいた仕事は、ポディマハッタヤさんの仕事です。

黒鉛をほるのに地下三百メートルの場所で機かいを使わず、手で黒鉛をくだいてとるなんて、とても大変な事だと思いました。黒鉛はダイヤモンドとおなじ炭素のなかまで、9Hの鉛筆は黒鉛四十五とねんど五十五のわりあい、6Bの鉛筆は黒鉛八十とねんど二十のわりあいで作られているそうです。鉛筆のこさのちがいも分かりました。

この本を読んで、「人間は鉛筆いっぽんすら自分ひとりではつくりだせない」とありますが、ぼくも本場にそうだなと思いました。ぼくが今使っている鉛筆には、たくさんの世界の人が力を合わせて作り出された物だと思ふと、すごくありがたい気持ちとすごいおどろきを感じます。一本の鉛筆から、ぼくの知らない世界の人たちとのつながりを感じる事が出来ました。ぼくのなにげなく集めていた小さくなった鉛筆のカンが、大切なたから箱になりました。

